

樹 下 の 戰 い

卷 頭 の 言 葉

十一月八日といえば今よりおよそ三千年の昔、三十五才（一説には三十才）の青年釈尊が、中インドのブッダガヤ、ニレンゼン河のほとり、菩提樹の下に端座して、夜明けの明星を仰ぎつゝ遂に人間最高の悟道をきわめ、仏陀としての最高の人格を完成された聖日です。この日を通常「降魔成道の聖日」と呼んでいますが、降魔といふのは幽現二境にわたる、ありとあらゆる魔神、惡靈、魔性のもとの、すさまじいばかりの戦いに打ち勝つたことです。それは死をもこめる厳しい心の戦いでした。戦い終った釈尊の五体は、さながら土中より発掘されたミイラの如くでした。然し、深くほんだ瞳孔は、深遠なる觀智と、無限の慈悲に輝いていました。

人間日常、心の葛藤、精神の相剋に悩みつづけています。然しそのいずれも菩提樹下における釈尊の、降魔の戦いほど厳しいものはありません。平和繁栄を求むる現代人も、この釈尊樹下の戦いを範とする時、一層精進の力は湧き起つて来ることでしょう。

鷲峰 12月号 目次

第2卷／第12号／通卷第18号

| | |
|----------------------------|----|
| 卷頭の言葉 / 樹下の戦い..... | 1 |
| 自我講義 / 第3回 | |
| 久遠の本仏と人間釈尊 / その3 .. 日高白象 | 3 |
| 関西・九州街頭布教紀行 / その3 編集部 | 4 |
| 阪南五市 | 14 |
| 和泉府中市 | 15 |
| 泉大津市 | 16 |
| 岸和田市 | 17 |
| 貝塚市 | 20 |
| 泉佐野市 | 21 |
| 堺市 | 22 |
| 戦災慰靈堂 | 23 |
| アーケード街の | 23 |
| 御子吼 | 23 |
| 学会寺院の門前 | 24 |
| 妙因寺 | 26 |
| 仏飯の功德 | 26 |
| 夜間布教 | 29 |
| 和歌ノ浦の平和島 | 31 |
| 和歌山第一日 | 32 |
| 和歌山第二日 | 34 |
| 北九州へ | 36 |
| 教学研修会 | 37 |
| お題目の滝 | 42 |
| 久留米講演布教 | 45 |
| 石小横法難靈跡 | 47 |
| 身延帰山の途 | 48 |
| 車中回顧 | 50 |
| 教説説明 ...13 第2回鷲峰教学研修会案内 | 52 |
| 本誌郵送料と誌代納入について ...53 編集後記 | 54 |
| 表紙題字 / 身延山法主藤井日静院下 | |
| 表紙写真 / インド並巒山へ渡る身延山金銅の釈尊像 | |
| 表紙印刷 / 大阪東洋印刷社 向長藤原秀憲氏寄進 | |

久遠の本仏と
人間釈尊

その3

日高白象

4

もう一・三年も前のことですが……
或る日のこと、偶然の機会に、日蓮宗でも
有名な或る高僧と、法華經の本尊について
語りあったことがあります。それは語り
あうというよりも、むしろ問答対決のよう
なものでした。

今、その高僧のお名前を申し上げるわけ
には参りませんが、その時の模様を、思い
出すまゝにしてみますと、それは突然
舞い込んだ一通の手紙から始まりました。

或る日、その高僧から、

「是非、一度、君と会って話したいことが
ある。自分は、何時、どこそこに行くから
都合がつくなら、そこへたずねて来るよう
に……そこで私は待っている」

というお手紙の連絡がありました。

そこで私は、指定の日、指定の時刻、指定の場所へ、それは始めて行く処でしたが電車に乗り、バスにゆられて、尋ね尋ねてやっとその家にたどりつきました。

玄関で案内を乞いますと、さっそく応接間に通されました。待つほどもなく高僧は温顔、微笑をたまながら入って来られました。

久しぶりの対面です。なつかしく思いました。ところが高僧は、挨拶もそこそこに

開口一番、「最近、本尊問題がやかましくなって来て

と銳くたずねられました。

温顔に秘めた鋭い質問、まるで禪問答かさもなくば武芸者が、相手の力量をためすため、有無をいわず、一刀、抜き討ちをしかけたかのようでした。

人をわざわざ呼びつけておいて、やにわにしかけた居合いの一刃、これが立ち合いならば、すかさず体を開いて抜きあわせもしたでしようが、実のところ愚鈍な私は、一瞬あっけにとられていきました。

「どうだネ」

と、うながされて、

「釈尊をはなれて、久遠の本仏はないはずですが……」

と、日頃の考え方を述べようとするときを、どのように解釈しているか、一口に言つてごらん」と銳くたずねられました。

るような鋭さでした。高僧は申しました。

「うん」

「釈尊をはなれて久遠の本仏はない……」
「はそうだ。だが私が今たずねているのは、

「そして、しかも無始久遠の昔、遂に始め
て、悟りを開かれました」

久遠の本仏そのもののことなのだ」

「うん」

「……」
「本仏は実在するのかネ、しないのかネ」

三千大千世界の虚空にあふれんばかりの、
六万恒河沙の地涌の菩薩を教化されました。

「もちろん実在します」
「では、どのように……」

これを本化の菩薩と申します」

「三世十万の諸仏、ならびにその教法、そ

「うん」

の眷属をも統一されているお方です」

「それ以来、本仏は、本化地涌の菩薩を本

「それはつまり、久遠の本仏という言葉の中の、本仏という字句に関する形式的な説明だネ。まあ、それでもよからう。では、

眷属として、終りなき永遠の未来にかけて、一切衆生を救済しようと、悲願されていることです」

久遠ということは……」

「なるほど、一応そういうことも言えるネ

「……本仏が曾て、無始久遠の間、生れつまり君は、無始無終ということを聞いた代り、死に代り、幾代も代を重ねて、いのだろう」
難行苦行をされました」

「そうです」

「それならそうと、そう言えば、よいぢあるはずだ。これちあ久遠の本仏が、無始無終であるとは言えないぢあるいかね。どうだネ」

「はい」

「然し、おかしいぢあるいか。君は無始無終ということを言いたいのだろうが、本仏が曾って、菩薩として久遠の修行をされたといふにしても、修行を始められたという始めがあるぢあるいか」

「？……」

「またその結果、無始久遠の昔に、悟りを開かれたといふにしても、始めて悟りを開かれたといふにしても、始めて悟りを始めたといふあるぢあるいか。観下は観心の線、私は教相の線といふもの教化にしても、その通り。始めて教化されたといふ始めがあるわけだらう」

「？……」

「始めがあるものは、必ず何時かは終りが

あるはずだ。これちあ久遠の本仏が、無始

無終であるとは言えないぢあるいかね。どうだネ」

「？……」

私は、言葉に窮してしまいました。

△観下は、私に一体、何を言わしめようとしているのだろう。何を聞き出そうとしておられるのだろうか

△観下の言おうとする所と、私の答えようとする所には、何處か根本的に食い違っている。このまゝでは何處まで行つても、互に突き当る所がない。路線が違うのだ。観下は観心の線、私は教相の線といふもの

だろうか

冷汗が全身に、ジリジリにじむ思いがしました。高僧は、をいも変らず、慈顔、にこやかに、ほほえんでおられました。私は

思い切って申しました。

「私は、久遠ということを、このように理解しています。長くなりますが、聞いて頂けますか？」

「うん、聞こう」

「窓下のように、簡明直載に申し上げることとは出来ないかも知れませんが……仏教では、一時間に別体なし。存在によって立つ」といわれています。

お釈迦さまが「諸行無常」と申されましたように、森羅万象は常に移り変っています。世の中に変わらないものはありません。一瞬一瞬すべてのもの、ありとあらゆるもののは変化しています。大は太陽系を中心とした宇宙から、小は原子、粒子に至るまで、常に絶え間なく移動、変化しています。

時間とは、こうした存在するものの変化

によって成り立っているものであって、時間がものを変化させているものでもなければ、また、こうした現象界の、存在するもの以外に、別に時間という、特別の存在があるわけでもありません。

時計という文明の利器は、太陽を中心とした宇宙の一定の運行を、文字盤の上に翻訳したものにすぎません。暦もそうです。暦や時計によって、宇宙が運行し、ものが変化しているのではないのです」

高僧は、

「初等科の講義だネ」

と笑いながら、解り切ったことを、私の言うがまゝに、なおも辛抱強く、ゆっくり聞いていました。私は更に言葉をつづけました。

「私が重ねて申し上げたいことは、現象界

に存在するもの以外に、時間という別のものが、あるのではない、ということです。

つまり時間の内容は、変化する存在そのものであり、時間即存在なのです。

たとえば「今こゝに」という言葉があり

ますが、今と指した時間的存在も、こゝと指した空間的存在も、実は同じ存在であつて、言いかえれば同じ存在するものを、時間的に翻訳して今といへ、空間的に翻訳し

てこゝと言つたのにすぎません。そして時間、空間の両面から、その存在の意義を強調したのです」

時に高僧は、

「そこで」

と申しました。それは早く本論へ入るようだ、うながされたかのようでした。

「そこで」

と私も、言葉を継ぎながら申し上げまし

た。

「久遠という時間も同様であつて、一瞬の存在を離れて、何処か別にあるものではないと思ひます。

移り変つて行く一瞬一瞬の存在は、何処かへ消えて無くなるものでなければ、また何処かにか、ためられるものでもあります

せん。

たとえ相を変え、性を変え、体を変え、或は働きを変え、因縁果報を変えながらもすべての存在は、寸分漏らさず、次の存在へと、たゞ移り変つてゐるにすぎないのです」

「そこで」

と再び私は申しました。

「そこで、現在一瞬の存在を、よくよくみ

れば、あくまでも過去より移り変って来た

した。

ものであり、同時にまた、未来へ移り変って行くもののですから、過ぎ去ったはずの、悠久の過去のすべての存在も、これら形成されて行く永遠の、未来のすべての存在も、そのまゝ現在の存在としてあります。

謬にも

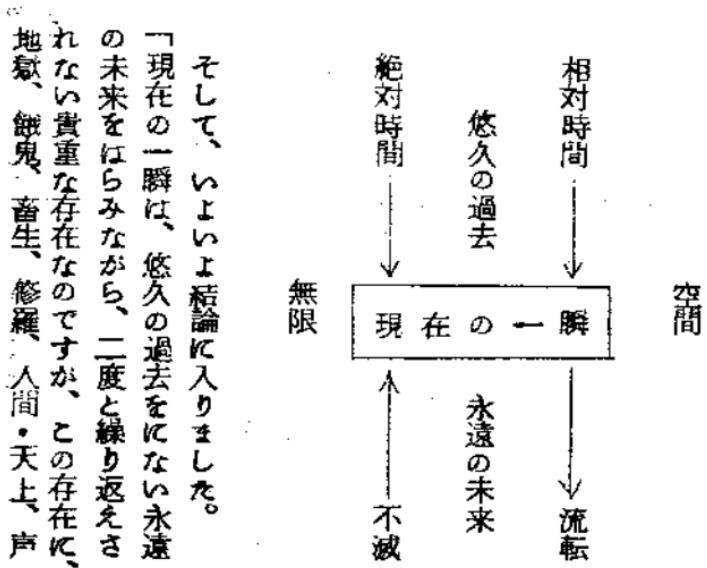
「現在は、過去の娘にして、未来の母である」

と申されています。要するに、变化起滅

しているはずの、現在一瞬の存在は、実は三世不滅、久遠の存在でもあるのです」

そして、いよいよ結論に入りました。

ここで私は、おこがましいことながら、あえて時間に、相対流転の時間と、絶対不变の時間のあることを、いや、そういう見方のあることを、次のように図解してみま



聞、縁覚、苦蘶、仏といふ十種の世界があり、またそういう世界が互具している世界観があるて、お釈迦さまは、その中の仏界の中にさえ、他の九界の具っているという、知見までも証得されたのです。

従つて、お釈迦さまが正覺を成せられて、いる現在の一瞬には、三世きわみなき、いわゆる無始無終の久遠の仏格が現成されていたのであり、そういう人間釈尊こそ、久遠実成の釈迦牟尼仏として、私は仰いで来てています。

日蓮大聖人が觀心本尊鏡の中で、

「仏、既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず」

これまで、くどくと述べて來ていた私はここで、こゝぞとばかり、このような結論をもつて、あたかも伝家の宝刀を抜き放つたように、ハツシと斬り込んでみました。いや斬り込んだつもりだったのです。

ところが高僧は、これを軽く受け流しながら、却つて、ビシリソッとさき込んで来ました。それは次のような言葉でした。

「たとえ一瞬の時間に、三世不滅の時間を論じてみたところで、既に仏そのものに、始めて悟りを開かれた始めとか、始めて説法された始め、というようなことを言う以上、本仏果上の一瞬の時間、たとえば一秒の何億分の一という刹那の中にも、その

と仰せられたのも、こうした存在觀にもとづいて、仏身を論ぜられたのではないで

す

しょか」

「……」

「どうだネ」

「……」

私は、いよいよ言葉に窮してしまいました。

た。というのは、これ以上、話を進むれば、その結果は、おそらく論争になり、どちらが勝つか、どちらが負けるか、或は喧嘩別れになってしまふか、というような危険性が、多分にはらまれて来たかのように感ぜられたからでした。

私は、こうした疑惑に、ひっかかり、返答に窮しながら、心に思いました。

へいへいと違うのです現下。本仏果上の一瞬においては、もはや始めもなければ終りもなく前後際断、起滅変化を超越して、既に、それ自体独立しているのです。一瞬の存在そのものが、既に完成された久遠の時

間であり、久遠とは、完成した独立の一瞬が、存在の変化推移とともに、非連続的に連続しているのです。

そして、この一瞬を仏身觀の上について言うならば、この一瞬に、本因もあれば本果もあり、本因も無始無終、本果も無始無終、その教化も無始無終であるが故に、常住此說法

常に、こゝに住して法を説く

と言ふことが出来るのです。

現下、こういう見方こそ、仏知見の道に

ある、というのではないのですか？

そう思ひながら、これを言い出すのを躊躇した私は、言葉に窮するまゝ、

「では現下は、久遠の本仏を、どのように

お考へになられてゐるのですか？」

と、逆に聞き返してみました。すると高

僧は、我が意を得たかの如く、即座に欣然

として答へられました。

「久遠の本仏とは、宇宙大の唯一絶対なる根源的靈格である。宗教学上では、諸法実相を体とした宇宙神といつてもよい。」

これならば天地と共に無始無終、始なき過去より、終りなき未来にかけて無限であるはずだ。

宗教は科学と矛盾してはならない。矛盾する時、迷信に墮ち入る。今後の宗教は、原子科学、物理学をも指導するほどでなければならぬ。

然し、こういう本尊であるならば、科学と矛盾することなく、むしろ科学をも指導して、世界を平和へ導くことが出来る。なしろ現代の科学は、原子弹、水素爆弾なんか作り出して、人類を破滅へ追いつめる

うとしているのだからネ。

どうだネ、私の本尊説は、簡明直截だろう。君も私から尋ねられた時、廻りくどいことを言わず、最初から、このように答えればよかつたのだ。何ごとでも、よく理解した者だけが、そのことを端的に説明することが出来るものなのだ」

私は、この高僧の言葉を聞きながら愕然としてしまいました。そして、あきれかえつたまま、暫く高僧の顔を眺めていました。
△何と愚かなことを……△

まず私は、そう思いました。そして、

△このお方は、日蓮宗の高僧であり、一部の人々からは、生き仏のようにあがめられておりながら、心は眞言の大日如来を本尊とする思想に墮ち入っている△

と、嘆かすにはおられませんでした。然

し、この時の私は、高僧の思想に反発する

ことも出来ず、むしろ、こうした考え方をもつた高僧の、たゞ高僧という名に恐れをして、汲々として問いつめられていた自身の未熟さを恥ぢ入りつゝ。

「下のようなお考えには、到底、私のような者は理解することは出来ません」

と答えていました。私は卑怯でした。高

僧は、いぶかしげに、

「ほゝう、こんなやさしいことが理解出来んのかネ」

と申されました。高僧は、なお温顔、にこやかに、ほゝえんでおられました。

▽以下次号▽

箋

他に注ぐ深き思いやりは

自らの人格を高めている

自己をみつめて人格を高めようとしても、これは容易なことではありません。何故ならば修行材料が抽象的であるからです。ところが日蓮聖人は化他人自行といって、他を教化教導する努力の中に、おのずから自分自身の修行が整い高められていると教えられています。

たとえ教え尊くほどでなくとも、人々は勿論、鳥や獸にも、木にも草にも、一冊の本、一本のベンにも注ぐ思いやりの心が深ければ深いほどまたそこに自分の勘定がなければならないほど、気付かない間にも人格はおのずから高められているのです。

教

明

説

関 西 · 九 州

街 頭 布 教 紀 行

そ の 8

これは身延山大学高校の学生が
夏休みを返上して
北陸・関西そして九州までも
二十一日の間
長駆街頭布教をした
紀行の完結篇である

編 集 部

阪 南 五 市

七月三十日、この日は阪南五市の街頭布教。かえりみれば布教隊が関西に入つて、はや五日。身延を出てから、既に九日もたつていた。

北陸から関西にかけて、連日、炎天下、十数時間にも及ぶ街頭布教には、さすがに隊員の誰もが、疲労の影をかくしおゝすべくもなかつた。

然し幸い、この五日間は、関西方面の布教基地ともなつていた布施の宝樹寺で、朝に夕に、住職和田布教師会長はじめ一山の親身も及ばぬ手厚い配慮款待をうけ、汗をまみれた白衣、手甲脚絆も毎日洗濯して頂き、この上もなく志氣は鼓舞されていた。

この日も隊員は、洗濯したばかりの、糊のきいた白衣に着替え、長谷川教務部長、日高主任を陣頭に、和田布教師会長や大阪

生野区法見寺の高木師と共に、阪南五市の街頭布教へ向つた。

阪南五市といふのは、大阪市の東南に隣接している五つの衛星都市、和泉府中市・泉大津市・岸和田市・貝塚市・泉佐野市のことである。

当地では初めて街頭布教のこととして、主催した和泉宗務所では、経費を一切負担し、動員も各都市における待機舗と、布教隊と同行する側とに分け、各都市は二台の大型貸切バスで連絡することになつていた。

和泉府中市

午前八時三十分、南海線の和泉府中駅につけば、既に駅前広場には、宗務所長（泉佐野市妙光寺住職）佐藤憲能師、布教師会長（堺市月藏寺住職）金山寛成師をはじめ管内寺院各聖は、いずれも手甲脚絆に身を固め、檀信徒はタスキがけにウツワ太鼓、

二台の貸切バスと共に待機していた。

この中には、昨日につゝいて明淨学院女子高校の老教師、今年八十六才になる赤阪日幸先生の、タイコをもつた姿も見え、また横浜から單身かけつけた身延山大本願人であり鷺峰贊助会員でもある新川祥司氏が

白の行衣に白鉢巻といつた凜々しい姿も見られ、感激と勇気が一緒に爆発。

挨拶をかわしている中、定刻の九時となり、和泉管内未曾有の街頭布教は、駅前広場における佐藤所長の第一声によつて切って落された。

布教のスローガンは、身延山を本とした宗風の宣揚、具体的には立正世界平和と創価学会の折伏である。街頭の獅子吼は、一、人間礼拝に徹することこそ

二、信仰実践の極地である
一、祈りなき平和はありえない
敵をもいつくしむ心を深めよ

永遠（とわ）の光はその祈りより生ず
といふ、二様の教義を中心として展開さ
れた。法鼓はトウトウとして府中市街にと
どろき、市民の耳目を奪つた。

信する者には歓喜を与え、信じない者に

は信を呼び起さしめ、謗る者には懲悔の心
を起さしめんと、とゞろく法鼓には、僧俗
一体となつた祈りがこもつていた。
行進団は府中商店街を通り抜けて、中町
の妙源寺（住職長田光應師）に参拝。こゝ
で喉をうるぼす間にも、山門前では、マイ
クを通して町内に布教。

更に行進は、和氣町の妙泉寺（住職山崎
俊雄師）へ向い、延々二キロに及ぶ道中、
隨所で布教。出迎えの檀信徒と共に妙泉寺
を参拝し、これより直ちにバスで泉大津市
へ向つた。

午前十時三十分、泉大津駅前広場で現地
寺院檀信徒と合流。堂々の大行進は玄旗旗
を陣頭に駆前商店街を圧し、大津神社前に
到つて街頭獅子吼を展開。

神社前には、

「身延山街頭布教隊来る」
「駆け、立正安國の獅子吼」

と大書した立看板が出されており、その
横に玄旗旗を立て、二台のマイクをすれば
ば、市民は黒山のようだ喧騒した。

それは文字通り黒山のようだつた。時刻
もよかつたのであろう、商店街に賃物に來
ていた人々が、どつと寄つて來た。たちま
ち神社前の街路は人波に埋つて、交道も一
時マヒ。交通巡回が整理に当つた。

まず佐藤所長の第一声があり、これにつ
いて同市慈眼寺住職久保泰雅師の挨拶。
久保師は泉大津市の市長でもある。この
あと長谷川部長は、創価学会の身延相承・

池上相承といり、いわゆる二個相承の偽妄

を突いて、これを糾弾。

人々は、熱弁に魅せられて身動きもせず、刻々聴衆は増えるばかり。これに勢いすいた学生隊員は、我れもとマイクをつかんで獅子吼をつづけた。

それは會って七百年前、日蓮大聖人が鎌倉小町の辻で説法された時も、かくやとばかり懶ばしめられるほどの盛況だった。

その間、堺市興覚寺の高木幸秀師は、日ごろ自慢のカメラで、しきりに状景を撮影していた。

これより行進は、神社前の商店アーケード街のウインドーも、書きで裂けるばかりに擊破しつゝ、成町の慈眼寺に参拝。ショウガのきいたアメ湯に元氣百倍。同市檀信徒に見送られながら、門前に待機していたバスで岸和田市へ向った。

岸 和 田 市

布教は予定されたスケジュール通りに進んでいた。午前十一時三十分、岸和田駅の手前、踏切り付近で下車。同市檀信徒と合流し、隊伍を整え、市中行進に入った。

行進は駅前よりアーケードの商店街へ進み、その中央で日高主任の獅子吼が爆発した。獅子吼は人類に祈るのそれであつた。

「人種の差別、部落の差別、國家・労資、そして宗教の差別、そうした差別観によつて、人類みずから不幸をまねいている今日、一切の差別を認めながら、なお平等に

輝く太陽の如き心、仏陀の心に帰れ、教導に帰れ」

と訴える雄叫びは、アーケードの市街にインインとして反響し、人々の心をゆすぶらざにはおかなかった。

街頭布教は、いよいよ盛り上つた。再び擊鼓行進は開始された。十二時三十分、同

市五軒屋町の本昌寺（住職久保玄忠師）に到着。ここで一時間休憩。その間、昼食。
僧陣が書院で少憩している間、本堂では街頭行進の興奮と感動にざわめく檀信徒の中、赤阪先生が教え子の婦人と、なつかしげに語りあっていた。共に街頭布教に参加して、何年ぶりかに、計らずも出あつた二人、今は八十六才の高令となつた老教師と、主婦となつた教え子。その対面は、うるわしい限りだつた。

また、この時、赤阪先生は日高主任に、肩にかけていた頭陀袋の中から、法華經一部八巻の経巻を取り出して贈呈された。それは在家法華經の行者として全国講演布教に生涯を捧げた妹尾義朗（せのおぎろう）氏が、昭和三十六年八月四日信州長野県において逝去されんとするに当り、形見として赤阪先生に托された絶品だつた。

「私も、あといくばくもありません。これ

僧陣が書院で少憩している間、本堂では街頭行進の興奮と感動にざわめく檀信徒の中、赤阪先生が教え子の婦人と、なつかしげに語りあっていた。共に街頭布教に参加して、何年ぶりかに、計らずも出あつた二人、今は八十六才の高令となつた老教師と、主婦となつた教え子。その対面は、うるわしい限りだつた。

一粒の実、これはやがて芽を出し、幹となり、一粒万倍の実を結ぶ。種子は、たとへ一粒であつても純粹でなければならない。一辺のお題目、それが純粹に本仏の因行果徳のものであるならば、このお題目が、やがて万人の心に、本仏の光と力を伝えて行く。

さて午後二時より、本昌寺に隣接する円教寺（住職岡田春孝師）本堂で大講演会。本昌寺出发に際して、須弥壇前机の横に安

は妹尾先生が生前の布教中、常に座右に奉じておられたものです。今まで私があづかっていましたが、私の亡きあと、万一千束になつてはなりません。日高上人に使って頂けるならば妹尾先生も御満足でしよう。」
ふと見れば、本堂前庭の麻鉄の木に、珍らしくも真赤な実が、びっしりとなつていた。

一粒の実、これはやがて芽を出し、幹となり、一粒万倍の実を結ぶ。種子は、たとへ一粒であつても純粹でなければならない。一辺のお題目、それが純粹に本仏の因行果徳のものであるならば、このお題目が、やがて万人の心に、本仏の光と力を伝えて行く。

さて午後二時より、本昌寺に隣接する円教寺（住職岡田春孝師）本堂で大講演会。本昌寺出发に際して、須弥壇前机の横に安

置かれている見事な日蓮大聖人の立像が目にとまった。

それは素彫りで、法華經の経巻を、がっしりと胸にだき、カツと眼を開いて、街頭の大衆に獅子吼している、雄渾な姿であつたが、あまりの見事さに、そのゆわれを住職久保玄忠師に尋ねると、「高村光雲先生高弟の逸品。無くて当寺に来たものである。彫刻界にあつては、値段は数百万円どころか、もはや値段もつけられないものとされている」ということだった。

光雲の実子、光太郎が、美術学校卒業記念に作製したのも「獅子吼」と題した日蓮大聖人の立像であつたが、素人目にも本尊寺の尊像は、高村光太郎のそれにも勝るかと思われるほど見事なものだった。

それにしても、キリスト教が歐米文化の底流となっているように、法華經信仰も、

近代的な高度の芸術、文化方面に普辺さるべきではあるまいか。

法華經の靈山虚空会の儀相、その大絵巻は、法華經一部八巻中のみならず、一切經の圧巻であり、その大絵巻の中には、高度の音楽、美術、芸術、小説、等々のあらゆる文化源が、その思想と共に、無尽蔵に秘蔵されている。

これは人類文化のために速かに開発されねばならない。仏滅後三千年、古色蒼然たる寺院、殿堂の奥深く、固く閉ざされた宝庫の扉を打ち破る時、それより放たれる大光明は、行きすまた現代世界文明の、あらゆる層の闇を照らすであろう。

それにしても、創価学会の如く、私利私利のため、安直に經典の真意を歪曲する者に、その任はない。

この大任を果すには、法華經を法華經のまゝに、その真意にふれた卓越した精神指

導者と、これに隨順する文化人との、一体となつた祈りをまつほかない。

現代日蓮宗の使命は、来るべき時代のため、まずそりした土壤を作る責任がある。

それは現代に生きる青年僧の、眞面目な結集によるほかはないのではないか。

さて円教寺の住職岡田春孝師は、日高主任と立正大学時代の同級生。ここでの講演会は、立難の余地となくつむかけた市内檀信徒に対して、金山布教師会長、日高主任、長谷川部長の順で展開され、多大の感銘を与えた。

これより一行は、円教寺をあとに、再び商店街を駆駆行進し、出はずれに待機中のバスで、貝塚市へ向った。

「歓迎、身延山布教師隊」
といり大きな幟幕が張りめぐらされていた。ここで小憩中、最初から行進に参加していた一人の老婆に、

「疲れませんか？」

とたずねると、

「もつたいない。疲れたなんて言うと、罰があたります。夏は何處におっても暑いものですね。避暑に行つても扇風機に当つてい

ても、暑い暑いと辛抱せねばなりません。然し、今日は千載一遇、身延山布教師隊のお供が出来て、有難いことです。どんなに暑くとも修行ですから、苦にもなりません。流れる汗は、功德の汗です」

貝塚市

貝塚といえばバレーボールで有名になつた日紡貝塚チームのある所。午後四時三十

と、にっこりほゝえんだ。ほゝえむ老婆

の顔は、お題目の汗で、人間の罪業を洗い流したかのように輝いていた。

泉佐野市

いよいよ阪南五市の最終地である泉佐野市に入ったのは、夕刻五時三十分。市内檀信徒と合流し、擊鼓行進して坂口町の妙淨寺（住職葛木惠照師）の門前、神社とあい対した街頭で、学会折伏を獅子吼。夕刻の買物に来ていた主婦たちの足をとづめた。こゝは商店街の入口に当っていたため、説法中、商店街の方よりも続々市民が集ま

り、妙淨寺門前は、激増する人だかりに、一時交通も途絶、布教は大いに成果をあげた。

これより妙淨寺を参拝し、春日町アーケード商店街から、駅前商店街を擊鼓にとりかせたが、折からのラツシユアワー、進行は、さながら人波をかき分けるが如く

であった。

駅前より踏切りを渡り、更に行進して市場町の宗務所妙光寺についたのは、夕刻既に七時になんなんとしており、思えば行進は、今朝九時、府中駅前の発進以来、既に十時間にも及んでいた。

然し布教は、これで終ったわけではない。直ちに本堂で佐藤所長導師のもと立正世界平和祈願を厳修。つゞいて講演会は、集つて来る檀信徒の都合上、夕刻と夜との二部に亘って開催された。

その夜、布教隊は、宗務所役員をはじめ大阪の和田布教師会長、法見寺の高木師と共に妙光寺に宿泊したが、妙光寺は、九老僧第一龍華石像上人の弟子妙実上人ゆかりの靈跡。

本堂須弥壇には、妙実上人が雨乞いの祈禱を修された時の御尊像が安置され、また寺宝として、その時の祈雨マンダラが格護

されていた。

伝えるところによれば延文三年六月、妙実上人は、朝廷の懇請をうけて雨乞いの祈禱をするに当たり、前もって雨傘と高下駄とを用意されたといふ。

この時の鑑験によって、日蓮大聖人に大菩薩号、六老僧大国阿彌梨日朝上人と九老僧龍華阿彌梨日像上人に、それぞれ菩薩号。更に京都大本山妙顕寺に四海唱導の称、ならびに妙実上人自身に、大覺の称号と、大僧正の官位をたまわり、爾来、大覺大僧正と呼ばれるに至った。

蓋し、朝廷懇請の雨乞いの祈禱に際し、前もって雨傘と高下駄を用意された大覺大僧正の氣宇こそ、学ぶべきものがあろう。

今その雨傘は、午前中参拝した和泉府中市和氣の妙泉寺に、高下駄は和歌山の宗務所海南市多田の妙台寺に格護されている。

布教隊は、日蓮大聖人滅後の直弟子・孫弟子たちが、大聖人の遺志を体して、果敢なる法戰に、身を挺して行つた往時を偲びつゝ、大覺大僧正祈雨修法にゆかりある妙光寺に、一夜の夢をむすんだ。

堺

市

明くれば七月三十一日、この日は和泉宗務所管内堺市の街頭布教。布教は昼間と夜間との二部に亘つていた。

特に、この日、夜間布教を決行するといふのは、あたかもこの夜が、関西の名物行事となつてゐる。年に一度の、堺市大浜海岸に魚市が立ち、堺市全体が、関西各方面より押しかける三十万人からの、人出に賑うからである。

魚市は通常、夜市ともいつた。はるばる身延から堺の街頭布教に來ていて、この夜市の人出を見逃すわけにはいかない。

早朝、佐藤所長の案内で、妙光寺を出発、

南海電車で午前八時三十分、堺駅に下車すれば、既に駅前広場には、「身延山銘頭布

教隊」という幟幕をはりめぐらしたライトバンの宣伝カーを中心に、管内寺院檀信徒をはじめ、遠く尼崎市より辰巳妙隆法尼の一行十数名、奈良からは立正靈山会の榎本蓮子さん、大阪からは妙經寺檀徒の宮本龍一氏夫人親子三名、等々大勢の方々が集合鼓譟待機していた。

戦災慰靈堂

定刻九時、堂々の街頭行進を開始。まず宿院通り川尻の戦災慰靈堂に参拝。戦災犠牲者追善法要を厳修。

こゝは文安元年十一月十六日、播州加東郡東条の郷において、いわゆる東条法難といふ迫害を受けた、錦冠り日親上人が、兵庫の浜より難を船でのがれ、こゝ泉州堺の浜に上陸、休む間もなく再び辻説法を展開

された遺跡という。

今、慰靈堂の境内中央には、日親上人四五〇遠忌に建てられた「御上陸辻説法之遺跡」という大きな記念碑が、往時の名残りを留めていた。ちなみに川尻という地名は、昔こゝが、海にそゝぐ河口であった為とか。

お堂の管理は、市内寺地町の本成寺住職野村恵澄師。野村師の説明によれば、堺市内の戦災犠牲死者は一八七八靈、このお堂に合祀しているという。

参集している市内遺族会の方々に対しても長谷川部長の挨拶があり、つづいて街頭説法の第一声は、この境内からマイクを通して町内へ向けられた。隊員は日親上人辻説法の遺跡に立ち、往時を偲びつゝ立正治國を獅子吼。

アーチード街の獅子

これより行進は、宿院通りの大小筋を

鞆鼓にとどろかし、やがて山ノ口筋のアーチ

山布教の熱気がうずまいた。

ケード商店街に入った。このアーチードの中央に神社の鳥居が立っていた。屈強な布教場所である。

直ちに二流の玄囃旗を鳥居の横に立て、街頭説法を開始したが、すえつけたスピーカーは野外用の大型。獅子吼はガンガンと商店街に響き渡った。

街頭説法も、やりやすい所と、やりにくい所とがある。然し、こゝは最もやりやすく、効果も多大な絶好の場所。獅子吼しても、聴衆の心がビンビンはね帰つて来るのが、よく判る。

日高主任が町全体の、聴衆の心の流れを感じつゝ、隊員の一人一人に、あらかじめ説法内容を指摘していた。

やがて聴衆は、アーチードの左右に人垣を作った。弁士が交代するごとに、あちらこちらで拍手が起つた。商店街には、身延

然し何時までも、ここで説法ばかりしてもらおられない。頃はよし。獅子吼は轟然ととどろく鞆鼓に代つた。行進は、たゞたゞ驚嘆している人垣の中を、堂々と進つて行った。所々で合掌礼拝している町民もいた。

学会寺院の門前

商店街を通りぬけて、暫らく行く中、左手に「日蓮正宗・本運寺」という門標の立つた寺があつた。いわゆる創価学会の拠地区拠点である。

幸い、これより数軒行つた所に、日蓮宗のお寺が並んでいた。大型スピーカーは、その門前に、学会の寺の方へ向けてすえられた。

今や明かに日蓮宗寺院対学会寺院の対決である。この日、緒戦を日蓮宗の方から切る以上、これを聞く学会側に歎慶も反抗の

心の起る隙さえ与えてはならない。息の
つく間もなく、折伏に折伏を重ね、彼等をして頭をたれしめ、膝をつき、土下座伏拜して、誠悔の涙を大地にそゝがしめるほどでなければならない。

焼けつくような真夏の太陽は、頭上にギラギラ輝いていた。隊員の顔には、汗がしだより、服装も衣も、白い汗塩を吹いていた。

ベテラン日高主任が古武士の如く、右肩から紐でつるした太鼓の柄を左手に握り、右手にマイクを握んだ。

獅子吼は、慄絶といおうか憤慨といおうか、心をすませて聽けば、夏なお身ぶるいするようを折伏だった。

折伏は、学会教学の細部にこだわりなく、その行動全体に亘る偽と陰謀、人間の贋腑の如きものを掘み出して、白日下にたゞきつけるが如く、学会の独善的驕慢をナチ

ドイツにたとえ、その教学をローゼンベルクが捏造した「二十世紀の神話」にたとえ、更に学会の青年行動隊をナチの親衛隊に、その暴虐性をユダヤ人數百萬を虐殺したボーランド・オーシュビツの悲劇にたとえ、完膚なきまで破折した最後に、

小罪なれども

誠悔せざれば悪道まぬがれず
大逆なれども

誠悔すれば
その罪消ゆ

という日蓮大聖人の言葉をもって、学会の猛省をうながし、町民にも多大なる感銘を与えた。

これより行進団は新在家町の円明寺（住職白井正貞師）に到り、昼食の供養をうけ更に一通り、市役所前を通り、堺銀座のアーケード街に入り、獅子吼して日蓮宗仏具店に小憩。更に行進して映画館の前で再

び獅子吼、これより材木町の妙国寺へ向つた。

妙国寺

妙国寺は、幕末、土佐の勤皇の志士が、外人に天誅を与え、その責任によつて割腹自決した史跡、として有名な日蓮宗の本山である。

妙国寺参道の入口には、

「とさのさむらいはらきりのはか」

といひ石柱が立つていた。本堂は惜しくも戦災で焼失。その本堂には、割腹した時の、志士の血糊が、そのまま附着していた。幸い、焼失したのは本堂だけで、他の建物や宝物は、昔のまゝ格護されていた。

仏飯の功德

講師は金山布教師会長・日高主任・長谷川部長の順、星間布教の最後のしわくよりとして、多大の感銘を与えた。終了したのは午後六時。

妙国寺の貫首安東正博師は、日高主任と立正大学時代の同窓生。卒業以来はじめての対面をなつかしがつておられたが、夜間布教に出動するまでの休憩中、日本一といわれる境内の名木、蘇鉄の由来について、次の如く語られた。

「学会の人々は一人でも多く、妙国寺の講演を聴きに来るようだ。しかし講演と宣伝勧説していたのにもかゝわらず、それらしき者の影さえなかつた。然し講演会場にあてられた仮本堂は、立雖の余地もなく、信徒は書院に庫裏に、そして境内にもあふれていた。」

妙国寺の開山は、宗門史上、安土へあらず
ち) 宗論や、三光無節会で有名な油屋日瑛
上人。

宛る時、妙国寺境内の石垣に、一匹の子
蛇がナヨロナヨロしていた。あわれに思つ

た上人は、御宝前に供えた御仏飯を、その

子蛇に与えることにした。

毎日毎日この日課がつづいた。とある夜

のこと、上人の枕がみに蛇があらわれて、

「私は毎日お上人からお仏飯を頂いている

石垣の蛇である。お仏飯のおかげで大きくな

ることが出来た。あまり体が大きくなっ

たので、もうこれ以上、石垣の穴に居るこ

とが出来ない。どうか本堂の床の下を借し

てもらいたい!」

と言つた。上人は許した。そして、

「借してあげてもよいが、決して姿だけは

人に見せるなよ。石垣の穴にも入れないほ
ど大きくなつたお前の姿を見たら、折角参

詣に來た人々でも、すっかりこわがつて、
お寺にお参りに来なくなる。すると、お前
にあげたいお仏飯も、あげられなくなつて
しまうから」

と、さとされた。

それからといふものは、上人は毎日、今
まで石垣の中に入れていた御仏飯を、本堂
の床の下に入れてやつていた。

こうして、何年かたつた或る夜のこと、

再び枕がみに蛇が立つて言つた。

「私は毎日、本堂の床の下で、専い法華經

詠誦の聲を聞き、その上、お題目のあがつ

たお仏飯を頂き、おかげで遂に得度するこ

とが出来た。然し私は、今夜他界する。な

きからは、どうか上人、ほおむつて頂きた

い」

翌朝、上人が、本堂の床の下をのぞいて
みると、今まで見たこともない大きな蛇が
死んでいた。

そこで、さっそく村人を集めて、蛇の死体を床の下から引き出そうとした。然し、あまりにも大きいので、更に応援をたのみ、やっと本堂の脇に埋め、ねんどろにお經をあげた。

ところが、その蛇の口から、誰も知らない不思議な木の芽がふき出た。芽は見る見る中に大きくなり、年と共にあたかも大蛇が、うねっているような大木となつた。

時あたかも、織田信長が天下を統一し、安土城を築いた。その築城中、お庭造りに当つて、堺の妙国寺に、不思議な名木があることを聞き、寺僧の反対を押し切つて、強引に、その木を安土城のお庭に移した。すると、その日から、夜な夜な、「堺の妙国寺へ帰りたい、帰りたい」と、木が泣き出したという。そしていよいよお城も完成し、信長の来城を迎ぐことになつた時、一夜にして黄色にかれてしま

つた。

これには、さすがに信長も無意味に思い直ちに妙国寺へ送り返した。するとその夜、「鉄を食べたい、鉄を食べたい」

と木が言つた。そこで木の根方に鉄を埋めると、たちまち木が生きかえり、黄色に枯れていった枝葉も、再び青々として蘇み返つて來た。そこで、この木を「蘇鉄」と呼ぶようになつたといふ。

間もなく信長は、法罰のためか、京都において、しかも、所もあるうに日蓮宗本山本能寺に宿泊中、明智光秀のため逆殺された。

一方、堺の町には火災があつた。連日の潮水期、町は全焼するばかりであつた。この時、蘇鉄の親株から水が吹き出、妙国寺とその町は類焼をまぬがれたといふ。爾來、人々は、蛇を宇賀大明神として祭り、蘇鉄を御神木として、今日に至つたも

のと/or。

安東貢主の物語りは、およそ以上の如くであったが、第二次世界大戦中、妙國寺の本堂は戦災に失つても、宇賀神堂と御神木の類焼をまぬがれたといふのも、こうした靈験が、より一層に感ぜられるかも知れない。

ともかくも、この物語は、蛇畜生の子でさえも、読經の声の中、御仏教によつて育つた功德の、偉大なることを教ゆるものであり、人間として寺といふ同じ環境に育つている学生僧の身にも、深く考えさせられることがった。

延山布教隊を廻むタベ」を催した際、大阪の信徒代表の方々から、「埠の夜市の布教では、充分注意しなさい。今東光の小説でも判る通り、河内には荒い人が少くはない。

そういう人々の中には、創価学会の者もいる。若し、身延山布教隊の学会折伏演説を聞けば、必ず激昂して、演説の妨害をするだろう。

妨害くらいならよいが、街頭のことでもあり、ましてや夜分、雜踏する人どみにまぎれて、アイクチでズブリツとさすかも知れない。

さゝれても、ひるまない覚悟で布教しなければ、返つて醜態を演じてしまつ。だから夜市の布教で、学会を折伏するのは、全く命がけのことなのだ

と、與々も注意されていた。
もとより布教隊としても、妨害されたり、

夜間布教

さて例年三十万人からの人出に賑わう埠の、夜市の街頭布教については、既に七月二十七日の夜、布施の宝樹寺において「身

斬られたり、さまれたりすることくらいに、で早目に夕食の供養をうけ、車の通交が避
忌れはしなかつた。然し、和泉管内寺院と断されない中に、全員ハイヤーで現地に向
しても、夜間布教を決行する場合、

一、市内のどの通りも、車の通交は禁止し

てしまふほどであるから、勿論、布教隊
の行進は、警察が許可しない。

二、また行進をしなくて、街頭説法だけす
るにしても、街頭に軒をつらねる夜店の
業者が、必ず営業妨害を訴えようし、ま
た、いわゆる地廻りが因縁をつけに来る。
三、学会と衝突して、流血の難にあうのは
覚悟の上であつても、業者や地廻りと争
うことがあつては、却つて布教はマイナ
スになる。

といつたことを勘案して、結局、行進は
中止し、駅前大通りに面した日蓮宗寺院の
門前から、市街に向つて説法するといふこ
とになつた。

そこで布教隊と現地寺院各聖は、妙国寺

間もなく日は沈み、夕闇が迫つた。街に
灯が入り、沿道に果しなく続く屋台店は、
埠の夜市ならではの、にぎやかさを呈して

いた。

埠の夜空に、間断なく花火が、勇ましく打ち
上げられた。
布教隊はお寺の門前に、スピーカーをす
えつけ、タカナヨウナンと二流の玄題旗を
立て、これを中心に、間隔をおいて左右に
陣取つた。

夜市が活氣を呈する頃、街頭説法も白熱
化して行つた。佐藤所長をはじめ現地布教
師会員も、和泉日蓮宗青年会員も、そして
身延の学生隊員も、一人残らずマイクを取
つて立正安國を叫び、学会を折伏し、身延

山を本とする日蓮宗の本義を宣説した。

やがて、大浜の浜でとれた鮮魚を、神社へ供える行列が、静かに前を通っていった。その後、布教隊の学生が數名、小脇に

ひとかゝえもある教箋を、もいめい抱いて思い思い夜市の人波の中へ散つて行つた。

彼等は、これだけの大群衆を目の前にして、こゝ一ヶ所だけの街頭説法だけでは、おさまりかねたのであろう。

事故やケガがなければ、と案じこと一時間あまり、その中、三々五々、無事に帰つて来たが、彼等は遠くまで人波に押し流されながら、単身教箋を配りつゝ説法し、説法して教箋を配つたといふ。全身、汗みどろになつていたが、思う存分やつてのけた後のように、晴々しくしていた。

こうして夜間布教は、およそ三時間あまりに亘つて敢行され、殺人的電車をさけるため、十時布教を切り上げ、現地寺院各聖

と労をねぎらい、玄題三唱をもつて別れを

告げた布教隊は、人波を分けながら堺駅へ到り、これよりシリーズ最後の布教地・和歌山市へ向つた。

和歌ノ浦の平和島

和歌山市歴についたのは夜十一時三十分改札口には和歌山宗務所長（海南市妙台寺住職）中井惠澍師をはじめ市内寺院各聖、養珠婦人会、妙栄講、題目講等々の各代表役員、檀信徒に出迎えられ、市内蓮心寺幼稚園のマイクロバス二台に分乗、宿泊地である和歌ノ浦の平和島へ向つた。

平和島といふのは、名勝和歌ノ浦の海岸から、橋をかけられた海中の小島。

こゝには、紀州の殿様の御殿が保存され、通称「紀州御殿」といい、今では平和会館と呼ばれている。

また小島の中腹に多宝塔があり、これは

徳川家康の側室で、七面山を開いた養珠院お万の方の、発願によつて建立されたもの。

現在国宝に指定され、宝塔の中には、お万さまのお墓が安置されている。

多宝塔の玉垣は、切石を組みあわせたものでなく、一枚岩をくりぬいた珍しいもので、この種の玉垣は、日光東照宮の玉垣と、身延の大野山本遠寺内にあるお万さまのお墓の玉垣と、あわせて日本には三つしかない、といわれている。

なお、この島をおもつてゐる松の枝が、みな海へ向つて垂れているところから、通称「下り松」と呼ばれ、名勝の一につに數えられてゐる。

こゝの主管者は、和歌山市東長町の正住寺住職中井亨貞師。身延山布教隊は、中井師の御厚誼により、七月三十日と八月一日の二日間、こゝ平和島の平和会館（紀州御殿）に泊ることになつていた。

和歌山第一日

明くれば八月一日、この日は和歌山日蓮宗青年会主催による市内街頭布教。夜明け頃、平和島山頂より、多宝塔の屋根越しに、和歌ノ浦にはゆる素晴らしい御来光をおがみ、午前八時、平和会館境内に集結した市内寺院檀信徒と共に、中井所長導師のもと、多宝塔に対して自我偈一巻を誦詠。午前八時三十分、堂々の市中鑼鼓大行進に入つた。まず海岸にそつて和歌ノ浦の港へ到り、何事かと烟集する港の町民に対して、獅子吼第一声を放ち、物質文明、機械文明の中に人間性の喪失されようとしている現代の危機を説き、

國土乱れん時は、

ます鬼神乱る
鬼神乱るゝが故に

万民乱る

とう立正安國論の一節を引用して、法華經信仰による人間性の復活を強調。多大の感銘を残して、市の平和塔へ向った。

途中、電車道路にそって創価学会の仏具店があった。この近くには学会の支部もあるという。そこで布教隊は、さっそく仏具店の門前にマイクをすえ、痛烈なる学会折伏を始めた。

論旨は、学会員の門前であるだけに、第三者に対して、みにくい内輪喧嘩、といふ印象を与えないよう、挑戦という立場でなく、あくまでも立正世界平和という大所高帰依厚く、所から、学会の王仏冥合という世界統一思想が、時代逆行であり、あたかも戰時中の、た。

我が国における、挑他的神道主義を本とする八紘一字思想に類し、或はナニスの世界制覇思想と、軌を同じくしていることを糾

団体の、宗教の美名にかくれた恐るべき政治的陰謀、野望に対する認識を新たにせしめた。

さて和歌山市の戦争犠牲者を祭る平和塔に到着したのは午前十時すぎ。塔とその周辺は、青年会によつて清掃され、香華も供えられていた。

こゝで長谷川部長導師のもと、慰靈法要を斎修。小憩して鷹匠町の感応寺へ向った。感応寺は、養珠院お万の方の剃髪得度の師日陽上人の開いた靈場。曾つて紀州家の後一時より、再び炎天下の遊行進にうつた。

町の要所要所では、現地青年会と学生布教隊が、交互にマイクをとつて街頭獅子吼道行く一般の人々にも、学会という宗教

をし、午後三時、近鉄和歌山駅前広場と近鉄デパート前にて街頭説法をもつて、

この日の布教を終り、蓮心寺のマイクロバスで平和会館へ帰り、午後四時より同会館大広間における、講演会と座談会に入った。

講演会は午後四時より、日高主任の「日蓮宗の本仏觀と創価学会の本仏觀」、つゞいて長谷川部長の「学会二個相承の偽妄」

について開催されたが、満場の聴衆の中に、日蓮宗以外の方々も多数出席し、熱心にメモをとっていた。その中には、和歌山大学教授の富山敏夫氏の熱心な姿もあった。

その後、質問座談会に入り、檀信徒と活発な意見の交換があり、「今後における、宗門青年僧の活躍に、期待するところ甚大である」

といふ檀信徒代表の発言に、翻れるような拍手が起り、夕刻七時終り。などやかな晩餐会に臨んだ。

和歌山第二日

翌る八月二日の街頭布教は、同じく和歌山市内。主催は青年会に代つて管内宗務所。午前八時三十分、平和会館を出発。市中の繁華街に街頭説法を繰りひろげつゝ小松原通りの蓮心寺に入つて昼食。

午後、再び炎天下の大行進を起し、和歌山城天守閣を遠かに望みつつ東長町の正住寺に到着。更に進んで、平和観音に参拝した。

平和観音とは、戦災犠牲者慰靈のため建てられたものであるが、境内は一五〇〇坪。昭和二十年七月九日、深更三時間に亘り、B29の大編隊が、和歌山市内を爆撃した。市民は逃げ場を失い、この広場に数千人の難民が集つた。その頭上、焼夷弾の直撃をうけ、七四八名という、いたましい死者を出した。

敵機の去った後、和歌山城の堀の内にも、人大いなる感慨に満ちていた。

人大いなる感慨に満ちていた。

多くの死体が浮いていた。死体は市街にも少くなかつた。それらは、皆この広場に集められて荼毗にふされた。その数は、何と千数百体。

阿鼻叫喚の生地獄と化した一五〇〇坪の広場で、千数百体の死屍を荼毗する慘烈な戦災直後の、この情景を思うだに、身ぶるいを禁することは出来ない。

布教隊ならびに行進団は、碧空にそびゆる観音像の慈顔を仰ぎつゝ、読經唱題、心から犠牲者の靈に向むけ、再び戦争のないように、と祈つた。

最後の街頭説法は、和歌山市駅の前だつた。こゝの説法は、当日のみならず、七月二十六日以来、八日間の関西街頭布教を通して、最後の街頭説法であるだけに、隊員の鬚子吼は、さきほど平和観音を参拝した時の、異状な心のたかぶりと共に、一人一

日高主任・長谷川部長の最後の講演があり、中井所長の挨拶もつて、二日間に亘る和歌山市内の街頭布教は無事に終了。

夕食の供養をうけ、門前より檀信徒の聲鼓唱題して見送る中、再び蓮心寺のマイクロバスで近鉄和歌山駅に至り、中井所長をはじめ管内寺院各聖、各講社代表各位と別れを惜みつつ、一路、布施の宝樹寺へ向つた。

電車が和歌山市街を通り抜けて間もなく夕日が最後の光芒を放つて西山に没した。さすがに隊員は、疲れ切つていた。誰も語る者はなく、深く席に体を沈め、夕闇にかすみ行く車窓の田園風景を、默念として

眺めていた。

その胸中は、七月一十一日身延山を出發して以来、十二日の間、遠く北陸より関西

にかけて、連日、互に助け合い、励ましありながら、最後まで、遂に敢斗し通すことの出来た、無量の感激にひたっていた。

然し、これも私たちの力ではない。各地における寺院體信徒の、温かい御指導・御協力のたまものにはかならない。

ひいては三宝諸天の冥加のおかけである。私たちは守護して下さっていたのだ。
と思う時、我れにもあらず感謝の涙の、にじむ思いを禁ずることは出来なかつた。

北九州へ

八月三日朝、関西布教を終えた隊員は、朝食も食べずに、たゞむさぼるように眠り統けた。日にやけた隊員の寝顔は、連日の

緊張から開放された安堵に安らいではいたが、さすがにみな類はとけ、眼はくぼんでいた。

九時一齊に起床、十時朝食とも昼食ともつかない食事をする時、試みに隊員の体重をたずねると、一貫目以上やせていない者は一人もなく、長身の和田龍昌君は、三貫目以上もやせていた。

特に関西布教の準備から実施期間の最後に至るまで、行動と共にざれた宝樹寺の和田布教師会長は、見る影もないほどやせほそっていた。この中で、日高主任たゞ一人、やせていないようのみかけられ、

「さすがにタフだ」

と、うらやましがられていたが、実は、やせることを通り越して、全身むくんでいたことが、後日、判明したほどだった。

お昼すぎ、九州へ西下する者以外の隊員は、長谷川部長と共に、宝樹寺を辞して身

延徳山の途についた。

日高主任に随行して九州布教へ西下する学生は、

身延山大学三年

川島本良、木村義賢、小林白峰

身延山大学一年

石川義治

以上四名

「まるで一尊四士だ」と笑つたが、地涌僧伽の単位であること相違はなかつた。

汽車のキップは、氣仙寺船代であり大阪日蓮門下連合団の幹部でもある勝見富士太郎氏の斡旋により、午後六時五分、大阪発の急行「霧島」号の寝台券を入手していた。

やゝ早目に宝樹寺を辞し、大阪駅へ行けば、プラットホームには連合団長南日常師

御夫婦をはじめ、勝見氏等の連合団の幹部を決行した時、数百名の聲援で歓かした嬉しい場所である。

ひとまずハイヤーで大雄寺に行き、朝動食をすませて暫し、刀禰御夫妻と談

々十数名も見送りに来ていた。

これら見送る人々の誠意を思えば、今までの疲れも忘れ、遙かに九州まで西下、講演布教する斗魂の、新たに湧き起るを覚えた。

北九州教学研修会

急行「霧島」が、九州の玄関口である門司駅についたのは、八月四日の早朝五時二十七分。

ホームには福岡県日蓮宗青年会の副会長である門司市大雄寺住職刀禰（とね）義昭師が出迎えに来ていた。

この駅頭は、今年の正月、九州街頭布教を決行した時、数百名の聲援で歓かした懐しい場所である。

話しあおのすから、去る四月十日より五月二十五日までの四十六日間、熊本より身延まで徒步行脚布教をして、道中、大雄寺に二泊した就聟会第一期卒業生三名のことに及び、或は日高主任が太雄寺に仮錦しながら、北九州を布教していた時代の、数々の思い出話にはさんだ。それは、一笠一鼓に身を托した、篠行のきびしさを物語るものばかりであった。

その後、一行は刀禪師と共に、同市谷町の本正寺に、多年病臥中の住職高木義介師を見舞つた。高木師は日高主任と立正時代の同級生。九州布教中、日高主任は屡々本正寺にも逗留してゐたことがあるといふ。高木師は、多年病臥にありながら、なお常人も及ばぬ氣骨を堅持し、宗門の前途を慨嘆する機縁は、まさしく九州男子の真骨頂を、まのあたりにするが如くであつた。一行は、師の回復を心より祈りながら、

門前よりハイヤー二台に分乗、行学研修会の会場となつてゐる八幡の龍潛寺へ急いだ。龍潛寺の歴史については、既に本誌四月号に紹介しているので、こゝでは割愛するが、今度の研修会は、実は龍潛寺住職松尾周輝師と刀禪義昭師とが発起し、これを本として福岡県日蓮宗青年会が主催する、と云ふ形で拡大されて來たものであつた。

一行が、龍潛寺に到着したのは午前十一時。既に本堂も書院も庫裏も、全山いたる所、午後一時より開催される研修会の準備で、ごつたがえしてゐた。

聞けば、今度の研修会は、最初、青年有志を中心として一泊二日、みつりと教学を研修する方針であったのだが、日高主任が来講するというので、北九州各地の檀信徒が、

「青年だけで、日高上人の話を聞くとは不公平だ。是非、一般信徒のためにも公開し

でもらいたい」

ところで、結局、初日は一般信徒のため、そして、その夜と二日目を、本来の青年教学研修に当てるというようになつたのだといふ。

布教隊としては、多くて二・三十人ばかりの精銳青年と、膝をつきあわせて談りあう研修会、と思つていただけに、その盛況には一驚せざるを得なかつた。

事実、檀信徒は各地より汽車や電車、或はバスで陸続として龍潛寺につめかけ、正午ごろには、さしもの本堂もあふれるばかりとなつた。

一行が、龍潛寺開山山本日誦上人御使用の仏間にひかえていたと、身延山大本願人井上イツノ（旧名ヨシノ）さんが、はるばる久留米より駆けつけられた。

井上さんは、今年の正月休み、久留米市より大牟田市にかけて街頭布教を展開した

際、貸切バス一台を提供されたことがあり、今度も北九州教学研修会開催に際し、八月七日、久留米へ一行を迎える私邸を開放して、公開講演会を開催することを発願。ボスター等で盛んに宣伝に努めておられる熱心な方だつた。

さて定刻の午後一時、研修会は福岡県日本宗青年会三十余名、市内寺院各聖、近郷各寺の立正青年会、檀信徒数百名の熱気あふるる中に、宗務所長木島智境師導師のもと、立正世界平和祈願から開催された。

つづいて所長挨拶。講演会は刀禰師の司会によつて進められ、まず隊員の川島本良君が、今回実施した北陸三県につづく関西街頭布教の概況を報告。

次に木村義賢君が「平和の宝塔」と題して所信を発表。（この原稿は、本誌八月号に掲載しているので御参照を乞う）

いよいよ日高主任が登壇、聴衆は檀信徒

を中心とすべきものであるのにもかゝわらず、始めから至極難解とされている日蓮大聖人の學問の眼目とされた本尊觀を論述し、

「久遠の本仏と人間釈尊の關係」

「大マンダラと釈尊の關係」

という宗門教學上の大問題を究明、更に「本尊と題目の關係」から「人間成仏の直道」を語り、「釈尊へ帰れ」と言葉を結んだ。

もとより參集の団信徒にとっては、聞きなれない教學上の、難解な内容ではあったが、日高主任の叫ばざるを得ない熱氣、迫力に魅せられたかの如く、カタズをのんで聴き入っていた。

その後、質問座談会に入った時、さつそく青年会の中より、「講師は、本仏釈尊が本尊である。と強調

されたが、それは日蓮宗の宗則に、大マンダラをもって決定の本尊とする、と厳明している宗憲に違反しはしないか」という鋭い質問があった。これに対しても

日高主任は、「法華經の經文に照しても、日蓮大聖人の真跡御遺文に照しても、久遠完成の釈迦牟尼仏が本尊であることに間違はない。大聖人圓顎の大マンダラは、靈山虛空会の儀相にのっとって、その内容を表現されたものである。

絶対という、そのものの内容は、様々に象徴し表現することが出来る。現存する大聖人圓顎の真筆大マンダラおよそ百数十幅の様式が、その中核は同一であっても、細部において様々の異りのあるのも、このためである。表現された形式にとらわれて、象徴しようとした内容そのものを忘れてはならない。

大聖人は、靈山虛空会上において、法華

ドの中、夕刻、感動的拍手をもつて閉会。

經を説かれた人間釈尊こそ、久遠実成の本
仏であり、この本仏釈尊と法華經、お題目
と本仏釈尊とが、本来一体不二であるとい
うことを、深く確信することの出来た者に
のみ、大マンダラを幽顯し、授与されたの
である」

と答えた。

これを皮切りに、質疑応答は、あたかも
白刃をまじえ、鋭せりあいをするかのよう
な銃撃の中、次々と展開された。後で、
「どうすれば罪障は消滅するか」

とか、

「唱題中に起る妄想は、どうすれば無くな
るか」
といつたような信行上の内容的質問もあ
り、また創価学会に対する質問もあったが、同じメンバーであったが、その中には遙く
これら真剣な質問を通して、檀信徒を中心 田川市より、日高主任の中学時代の老恩師、
とする教学研修会は、白熱化した興学ムード 中先生御夫婦の姿も見えていた。

その後、夕食を共にし、つゞいて書院に
おいて、青年会ならびに檀信徒有志と共に
座談討論会に入つたが、昼間展開された日
高主任の講義内容を本として、教学上、乃
おいて、青年会ならびに檀信徒有志と共に
渡りするような研修は、折角の機会、寸刻
の時間をも惜むかのように、予定の夜十時
閉会は、十二時に延長されても、なかなか
終らず、ふと気がつけば、夜は既に白みか
けていた。

さて翌日八月五日の研修会は、再び龍潛
寺本堂において、午前八時より松尾住職導
師による唱題修行に始まり、午前九時より
展開された日高主任の講義は、昨日の概要
を、更に平易に普辯するように説かれた。

参考集の檀信徒は、昨日につづいて、ほゞ
を、

こうして一泊二日の教学研修会が終了したのは、その日の正午であった。かえりみれば当地における僧俗一体となつた、かる素晴らしい大集会は、正月冬休みに展開された身延山街頭布教について、今度で二度目であるたが、この年二回に亘る行学一道の大集結を通して、

△若し、こうしたことが全国各県下に、定期的に行われるようになつたならば……と思ふだけでも、日蓮大聖人の魂魄を留める祖廟身延山を本として、全宗門が一致団結し、世界に向つて立正安國の大行進を展開して行く、あの足音が、大地の響きがそして十方法界・虚空にもとゞろく轟轟の大法音が、耳孕をうつがの如くであつた。

△それには、まず一人が立て。一人立てば百人が立つ。百人立てば県下が立つ。県下が立てば全国が立つ。△地上の人類危機の時、大聖人門下の法華

れられた身延山街頭布教について、今度で二度目であるたが、この年二回に亘る行学一道の大集結を通して、

経の行者は、常に時代の一歩前を進んで、人類の正しき方向を指示し、誘導するようでなければならぬ。研修会終了後も、なおさめやらぬ感概の中、松尾師、刀彌師に案内されて門司の大雄寺へ赴き、ここで静かに宗門青年結集の在り方を語りつゝ、その夜は大雄寺に泊つた。

△なお龍潛寺における、一泊二日に亘つた、日高主任の講義内容の愈貌は、目下本誌上、「自我協調義」として改題補足連載中のことで、こゝでは割愛する。

お題目の滝

明くれば八月六日、朝九時、大雄寺を辞去。こゝより程近い日高主任の親戚に当る日高産婦人科医院に立ちより、昼食の供養をうけ、門司港駅より直方へ向つた。直方市には同じく主任の親戚長谷川仏具

店があり、こゝに荷物をあずけ、ハイヤーで主任の生れ故郷、福知山々腹の名勝・上野（あがの）峡へ登った。

こゝは滝を中心とした県立公園になつてゐるが、その本滝より、川にそつて断崖をよじ登ること数丁、人跡未踏と思われる原始林の中に、更に一つの滝があり、その高さおよそ六メートル、そゝり立つ岩壁には、落下する滝のシブキをあびながら、南無妙法蓮華経のお題目の七字が、およそ二メートルばかりの丈に、驚くほど大きく刻み込まれていた。

滝壺はなく、あたりは広さ十数畳敷きぐらいいの平たい岩盤、その下は急転直下の断崖絶壁となつており、瀑滝は、岩盤に飛沫をあげながら、断崖へと奔流していた。なおお題目の岩壁に対し、なゝめ横から數丈の巨大な一枚岩が、天をむきようにつそり立ち、しぶきにぬれた赤い岩肌に

は、シダの葉が無氣味に垂れ繁っていた。
あたりは人の気配すらなく、泊々たる滝の轟音と共に、今にも岩影から、龍神でも出て来るような、神氣せまるものがたゞよつていた。

見あけるような岩壁の岩題目は、日高主任が十九才で出家した翌々年、立正大学の夏休み中の三週間、郷土の恩に報いんと、こゝにこもって刻みあげたものという。

使用したノミは、守という字格の五十一本。食糧に窮して断食すること五日間。こもつた岩小屋が滝の下に、そのまゝ名残りを留めていた。

一行は滝に打たれて山を下り、麓の公園に出ると、茶店の人が、「御出家さん、御修行ですか。この本滝の上流には岩題目の滝がありましてね、むかしむかし偉いお坊さんが、星は村里に托鉢しながら、夜は滝にこもって岩題目を刻ん

でいました。毎晩毎晩刻るノミの音が、コツチン／＼村里までも聞えていたということです」

伝説というものは、大抵こうして作り上げられるものなのだろう。刻んだ本人が今、眼の前にいるというのに、吹き出したくなるような笑いをかみしめながら、「そうですか。有難いことですね。あなたもお題目を唱えなさいよ。村中がお題目を

唱える因縁があるのでしよう」

と答えると、こゝより出るバスで直方市へ引き返した。途中、新木田（すいきだ）といふ部落で下車、身延の布教研修所で修行中の野村光正君の実家をたずねた。

こゝは、野村君のお父さんの強盛な信仰によって、最近、新寺建立したばかりであるが、この部落からは南北朝の頃、無縫禪師という名僧が出ている。

無縫は十九才で出家し、中国に渡って天目山で修行。帰朝して後醍醐天皇の帰依をうけ、晩年故郷へ帰り、福知山が天目山に似ている所から、その山麓に勅願寺天目山興國寺を建立している。

日高主任も中学時代、無縫尊師のあとを慕つて、暫し新木田部落で勉強していたことがあるというが、野村君のお寺の建立は、こうした古い土地の因縁を開拓するものであろう。

部落のすぐそばには、彦山川が流れ、その川の向う岸には、稀の木林の木の間に、主任生家の屋根が遠望された。

夕刻、直方の長谷川仏具店に帰り、駆けつけて来た野村君のお父さんをはじめ、親族一同と、楽しい夕食談話の一時をすごした。

その折、田川市から田中先生の夫人が、わざわざ挨拶に来られ、また身延山大学二

年在学中の、福本実君の実家よりも、一座
読經の依頼があつた。
こうしてその夜は、同じく主任の親戚に
当る市内の高橋徳江さんのお宅に一泊。龍
谷大学を今春卒業した長谷川仏具店の長男
の方と、仏教大學々生の在り方とか、題目
と念仏を対比しながら、夜のあけるのも忘
れて論じあつた。

久留米講演布教

翌れば八月七日、早朝、直方市をあとに
久留米へ向つた。列車がホームに入ると、
井上さんと家族の方々が駆けよつて来た。

井上さんの邸宅は久留米市白山町三八四
有名な水天宮の近くだつた。飼主人は八女
郡切つての材木商。門前には、「身延山布教隊來講、日蓮主義大講演会」
といつて立看板が出、市街の要所要所に、
はり出されたポスターと並んでいた。

既に市内寺町の妙正寺住職田中潮榮師を
はじめ、聴講者も続々つめかけていた。妙
正寺には正月久留米街頭布教の折、一泊の
御厚誼にあづかつたことがあり、田中師と
は、当時の布教の思い出に、話しつきな
かった。

大広間の二間をぶち抜いた会場に參集し
た聴講者は、殆ど他宗の人が多く、その中
には元運輸大臣橋瀬渡氏の、お妹さんの姿
も見かけられた。

主任講義は、午後一時よりの御宝前にお
ける立正世界平和祈願の後、

「仏と神と人間」

と題して、キリスト教の神、生長の家の
神といつた各教・各宗・各教団の本尊と、
法華經に開闢された久遠の仏陀釈尊との靈
格を対比論究して、実存する法界の実相体
系を明かし、更にこれを娑婆三界に実現す
る人間菩薩道を説き、人間愛の、慈悲に昇

華さるべき要諦が示された。

講義は酒々三時間に亘り、一旦休憩して

夕食、夜の部は午後六時より再開されたが、その休憩中、久留米と大牟田の中間にある灘高町本淨寺から来られた徳永さんの御姉妹は、三月身延山における青年行学講習会にも、はるばる参加されたほど熱心な信仰者であるが、この時、いだいた本尊問題を、日高主任に膝すめで質問していた。

その要旨は、「これまで私たちは、久遠実成の釈尊とは、本仏が、インドに釈尊として應現され、その釈尊が八十年の生涯を終えて、再び本仏の本体に帰つて行かれたと教えられ、そう信じて來ていたのであるが、三月の身延山講習会の時の講義にしても、また本日の講義にして、日高上人は、法華經の本法を説かれている時の人間釈尊こそ、久遠の本仏であり、この人間釈尊以外に、別に久遠の

本仏を認めるものではない、と主張されている。

これでは、まるで主客が正反対になつてゐるようであつて、どうも納得することができ不出来ない」

といふことだつた。

そこで日高主任は、夜の部において、「ものには、ものゝ見方というものがあるように、信仰にも信じ方という、自己の見界がある。自分は、これを、このように信じるといふ、確呼たる見解がなければならぬ」

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・声聞・緣覚・菩薩・仏という十界が、法界にもあり、人間已心中にもある。

そこで私たちは、その十界の中の、いづれの見界に立つて、どのようにものを見、ものを考え、ことを行ひか、ということを定めねばならない」

ということを前提として、法華經の提婆

達多品と不輕品を引用し、祇尊の提婆達多に対する人間の見方、不輕菩薩の迫害する人々に対する人間の見方を論証、畢竟して人間一念信解の在り方を究明し、多大なる感銘を与えた。

さて翌る八日は、日中、井上さんに案内され、お孫さんの理香子ちゃんたちと共に高良山を見学。夕刻より手甲脚絆に網代笠一尺三寸の太鼓をうつて、久留米市の繁華街を鑼鼓行進。教義を配布しつゝ妙正寺に参拝、或は主任の九州布教時代、屡々逗留したことのある東町の中園氏宅にも立ちより、一時間あまりの修行に汗を流して、再び井上邸に帰着。
「如何にすれば久留米を、法華經の都にすることが出来るか」
と語りつゝ夏の夜をすごした。

さて翌八月九日、早朝、井上さん一家と別れを惜みつゝ差し廻しのハイヤーで久留米市より佐賀県小城郡三日月村高田ノ里の主任の一子陽子さんの実家へと向った。
実家は農家、屋前こゝに着き、午後より陽子さんも一緒に、同村岡本部落の日親堂に参拝した。
日親堂とは、たんほの中の三昧堂。曾て鎧冠り日親上人が、十九才にして西海總導師となり、中山法華經寺より派遣されたことのある東町の中園氏宅にも立ちより、一時間あまりの修行に汗を流して、再び井上邸に帰着。
言を獅子吼していたところ、迫害は日々につのり、遂に庄屋が農民を督励して、夜半、こゝに穴を掘り、上人が布教に来た所をとらえて生埋めにした。

ところが、死んだはずの上人か、その後

石小積法難靈跡

も同じ場所で布教をつづけ、獅子吼は一層
猛烈をきわめた。一方、庄屋の実子が一人
行方不明となつた。

（よもや）と思つて、穴を堀り返えしてみ
れば、上人の死體ではなく、庄屋の実子の
死體が出て來た。

庄屋は前非を悔い、農民と共に即座に改
宗し、穴のあつた所に基を建て、諸法の罪
の犠牲となつた子供の靈を厚く供養したと
いう。

今、日親堂の内には、庄屋の子供の墓と
並んで、上人みずから刻んだ日蓮大聖人の
供養塔、上人逆修の宝塔、そして上人の生
涯において殉難した弟子の供養塔の四基が
並んでおり、人よんで石小積法難靈跡とな
る。

賀県日蓮宗寺院によつて顯彰碑が建てられ
ていた。

日高主任は終戦直後、昭和二十一年の元

旦より一百日間、こゝにこもつて三十五日
間の断食と焼身供養の荒行をし、北九州の
開教に転するまで数ヶ年間、日親堂を中心
に布教したという。

一行は、青年日親上人の忍難弘教のあと
を偲び、暫し唱題修行にほげんだ。こゝよ
りは東の方に、立正大学教授執行海秀先生
が得度した勝妙寺、西の方に遙かに、松尾
山光勝寺の屋根瓦が望まれた。

その夜、高田ノ里に一泊。翌十日は陽子
さんを伴つて、玄海灘に臨む呼子港から舟
で名護屋港へ渡り、太閤秀吉が朝鮮征伐を
した時の拠点、名護屋城趾を見学。十一日
早朝、小城を去つて身延帰山の途についた。

身延帰山の途

陽子さんが佐賀駅まで見送つてくれた。
陽子さんは今中学三年生、四つの年、開教
に出られた父なる主任と別れて以来、十数

年の中、東の間の再会も、わずかに數度。

そして今まで、こゝに別れなければならぬ父子の胸中には、表面はがらかに振舞いながらも、言い尽せぬ切ないものがあったことだろう。

唐津線から長崎本線に乗り換える折、プラットホームでキリスト教の牧師と出た。この時の模様は、本誌八月号に、

「握手と合掌」と題して、学三の川島本良君が記載しているので、こゝでは割愛する。

さて博多駅では、わざわざ久留米より来られた井上イツノさんと、お孫さんの理香子ちゃん、そして身延山大学二年の永江義子君たちの出迎えをうけ、東公園の日蓮堂の大銅像を参拝。銅像事務所を訪ね、去る七月二十五日遷化された貢首藤山英博上人の靈廟に香華をたむけ、心から増丹妙道を祈つた。

思えば今年の正月、福岡市街頭布教の際身延山学生布教隊はこゝに一泊、貢首猊下の激励をうけたが、その時の温容は既に無い。特に日高主任は学生時代より、上人は我が子の如く愛されていたといふ。読経回向する主任の声も、さすが嗚咽にふるえていた。

主任は言つた。

「私は今までの中、親にも師にも、恩にあずかつた多くの人々、そして藤山院下にも、何ら報恩らしき報恩の真似ごとすら出来てゐない。不幸の罪は、身をけずるようだ。

然しそれでも、わずかに心の安められることがあるとすれば、それは昔のまゝの自分一人だけではなく、同じ行脚姿ながらも身延山の玄関旗をかゝげ、学生布教隊と共に、堂々たる幕政宣令の姿を、おめにかけることが出来た、という此の事だけだ」

然し身延大聖人も報恩妙の絵文に、

花は根に返り

眞味は土に留まる

この功德は

故道善坊の聖靈の

御身に集るべし

と仰せられている。広宣流布のため故に
尽そうとしても尽すことの出来なかつた報
恩の誠は、妙法広布の花の咲いた時、世界
的な大功德となつて、それまで報いられなかつた恩人の上に捧げられることだろう。
「乘恩入無為、真実報恩者」出家沙門の道
は厳しい。

車 中 回 願

八月旧盆直前のこととて列車は、どれも
超満員。このため門司大雄寺の刀禪義昭師
が八方に手を尽し、やっと「はやぶさ」特
急券五枚を入手。これで行けば、翌十二日
の朝七時三十八分、静岡につき、正午まで

には身延山に帰りつくことが出来る。

一行は博多より普通列車で門司まで行き
刀禪師より五枚のキップを受けとつた。見
送りは刀禪師一人だつた。同じ門司駅頭、
出迎えの時も刀禪師たゞ一人。

北陸三県から関西、ついで遠く九州の
地に至るまで、二十一日もの間、十数万の
日蓮宗現地寺院禮信徒と共に、死身弘法の
意気にもえ、華々しい街頭布教・講演布教
を重ねて来ただけに、今ホームに見送る最
後の、この一人の姿には、言え知れぬ無限
の重みが感ぜられた。

特急「はやぶさ」は門司発午後六時十九
分。西海に沈みゆく真赤な夕陽をあびながら
一路東海道を暮進した。

車中、静かに想つた。

△我々は現地の熱狂的な歓迎をうけた。身
にあまる接待もうけた。そしてこの二十一
日間、十数万の人々を動員した鼓譟は、文

字通り祖国の大地をゆるがし、虚空をもと
どろかすばかりであった

さりとて、今の我々の未熟さは、いくら
懺悔しても懺悔し切れるものでない。懺悔

然し、あの華々しい後に、我々は一体何
を残したのだろうか。あの堂々たる大行進

し切れない底において、無能のまゝにも驟
鼓宣令、如説に逆行するほかない青年沙門の
道はない

出として留まり、やがて月日と共に忘れ去
られるのだろうか

こうした反省は、予想以上に余りにも華々
しかった成果に対する反動であろうか。

我々はやせた。全くやせた。精根の限り
をつくして戦い通した。然し、それにして
も我々は、あまりにも未熟だ。あまりにも
不徳だ。あまりにも日頃の修行が足りなす
がる。そして日頃の不徳・未熟さが、こう

ともあれ、修行即布教、街頭に祈るみず
から修行をもって、そのまゝ布教となし
た二十一日間であつたのだ。唱え抜いた何
万辺、何十万辺の开のお題目の中には、自
我の計らいを去り、本仏無作のお題目もあ
つたことだろう

聖人の如き大人物とはいわなくても、その
直弟子六中九老僧の如き青年僧であつたと
したならば、もつと内容的に充実したこと
は、疑う余地もない。それに較べると、何

時かは必ず芽生ることを信じよう

と我々は幼稚なことか・・・・
さりとて、そのお題目が、何人かの人々で
あってもいい、その心田にうえつけられ、
身延山に帰つたら、もつと修行し、もつ

と勉強するのだ。そしてまた次の機会にも
誓願宣令するのだ。たとえ現地の熱狂的歓
迎はなくとも、今度のように僅かな同志で
も励ましあい、助けあって、みずから仏陀
の悲願に生き抜いて行くのだ。

最後に、このシリーズ中、御指導・御協
賛・御世話を下さった各地宗務所・管内寺院・
檀信徒の御熱誠に対し、心より感謝申上げ
御当地の宗風ますます宣揚されますよう、
遙かにお祈り申上げて、本紀行の歎筆をお

く。
をお別動隊として関西以降の布教中に頂
いた淨財は悉く、本誌発行資金とさせて頂
いたことを謹んで報告する。

驚峰会の教学研修会は、三月大
阪府下の八尾市安國寺における第
一回にひきつき、第二回目を左
記の通り開催いたします。

時 昭和四十年一月八日午前九時
より十日正午まで三日間
所 山梨県身延町波木井山頂

醒悟園本妙庵

テキスト 大東出版社発行、宇井

伯寿著、仏教哲学の根本問題
研修テーマ 理と事

参加資格 本誌購読青年僧

会費 不要

申込 本妙庵日高白象あて

驚峰会第一期卒業生は万障縁合
せて御参加下さい。(途中参加
也可)

(おわり)

第2回 驚峰教学研修会案内

本誌郵送料について

本誌は五十頁以内の場合、印刷代は一冊につき約四十円、郵送料は十円、合計五十円で、郵送料とも五十円という本誌頒布箇では、トントンという状態でした。ところが五十頁を超過した場合、印刷代も高くなるのは本よりのこと、郵送料は一辺に倍額の二十円となり、本年発行した各号を平均すれば、一冊の単価は約七十円に相当しています。

これでは一冊につき毎月二十円の赤字を出して来た訳です。この赤字は、鷲峰会学

生の休暇を返上した各地街頭布教の淨財をもって補填されて来ました。然し、こうしたことが何時までも続くはずはありません。

そこで本誌の健全運営と永続性を期するため、緊急運営会議を開き、昭和四十一年の新年号より、頁数を約五十頁とし、

これまで本会が負担していた郵送料の十円

は、読者の負担とさせて頂くことに決定いたしました。そこで本誌の定価は一冊五十円、送料十円、計六十円ということになります。半年分の場合は三百六十円一年分の場合は七百二十円となるわけです。

何とぞ本誌の永続的健全發展のため右御了解をたまわり、一層の御協力を

お願いする次第であります。

誌代納入について

本誌は贊助会員の御丹誠により毎月読者数を増やして参りましたが、誌代未納の方は本年分は旧価額により、新年からは新価額により御入納をお願い致します。

をお別便ハガキにて不足額をお通知申上げますので、よろしく御願い申上げます。

発送部

編集後記

鷺峰（十二月号）

昭和三十九年 第二卷第十二号
通巻第十八号

定価五十円 二十円

昭和三十九年十二月二十一日

昭和三十九年十二月一日

編集兼发行人　日高白象

印刷所　甲府市中央二丁目五ノ二三

天野謄写堂

発行所　甲府市朝日三丁目一番地

妙本寺内

鷺峰会

電話（甲府）一一局五五八五番

振替（甲府）二〇九三番

誌料（来年より）半年分三十円 二十円

一年分六十円 二十円

△年内に新年号まで発行しよう、と頑張ったのでしたが、追いつきませんでした。新年号は新年早々に、二月号は正月末までに発行いたします。十二月号は街頭布教紀行を完結するため、過半数の頁をさき、他は割愛されました。然しこれによつて、新年号よりはバラエティに富んだ編集が出来ました。△本年八月九月号あたり、発行が急に遅れだし、頁数も薄くなつたため、読者皆様には随分御失望・御迷惑・御心配をおかけしましたこと深くお詫び申上げ、且つ却つて御激励下さりぢ変らぬ御支援をたまわりましたこと衷心より感謝申上げます。△明年は本誌創刊三周年を迎えます。これを契機に一層読者皆様の御熱誠にお応えしたいとそればかり念じています。ではよいお正月をお迎え下さいますように。

賛助会費　一年分三〇〇〇円（分納可）